

江戸時代前期に於ける

津輕藩の新田開墾(下)

奥本 算人

四、信政治下の新田開墾

信政は明暦二年二月二日に襲封した水、この時信政十一才、当然藩政を直接執る事は出来ず、後見役は津輕十郎左エ内信英(信牧の次男、信義の弟)に仰付けられた。(津輕一統志) 従つて襲封直後の政治は信英によつて行われたものと思われ、この信英寛文二年に歿し、以後藩主信政による政治が行われたものと認められる。津輕藩の諸制はこの時期に確立したと云ふ。

信政に領内開墾の志大いにあつた事は多く史料に見られる処である。これを領内巡見と云う観点から見る事も一方法である。これを地域的に見る

一、外ヶ浜(上磯、下磯を含む)

明暦二年二月、寛文元年八月、天和二年八月、貞享元年三月、元禄五年九月、宝永四年七月(津輕信政公事録要)

二、面浜方面

天和二年五月、貞享元年八月、同三年八月、元禄三年三月、同五年九月、宝永元年三月、同三年八月、同四年七月、同五年八月、(同)

三、新田地方(下ノ切方面)

貞享元年八月、同三年八月、元禄五年九月、同九年八月、同十一年八月、宝永五年八月、等の記録を見る事が出来る。勿論この巡見全部が新田開墾獎勵、乃至は開墾状況參觀のものとは云えない。例之は外ヶ浜巡見の場合、明暦二年、寛

文元年の巡見の後、寛文三年に至つて、外々浜青森新町上中下三町に而六度之半被仰付、依之外浜中此処にて商賣可致旨（津輕信政）仰出られた事からも、二度の巡見は右の令と関連ある事容易に推察される処である。この事は西浜（鰯ヶ沢水中心）下向に際しても云いうる事である。しかし新田地方への巡見は南拓奨励、状況視察以外に目的を見出し得ない。一交通上、この地方は西浜へ下る途中に当り、西浜巡見の際に止まる事もある。この巡見の他、元禄七年に龜ヶ岡に御飯屋を建てた事（第三節参照）、及びこの頃木造にも御飯屋が存在した事からも、これらの建物も、巡見の際の宿泊所として利用されたであらう事も推察される。即ち新田開拓奨励の爲と云う事も推察されるものである。

前代、信義の時期迄に領内の比較的新田の取立易い処は、同々南発しつくされた。従つて津輕平野の奥部、沿岸地帯は開拓行詰りに落入り、以後は下ノ切以北の、津輕平野の北半を中心に行われる事になる。而して、この開拓に著は、小知行と云

われる輕輩の藩士をもつてしたのである。下ノ切とは津輕一統志に「（原）原より下通、飯詰金子玄云」とあり、（原）原より北方の岩木川の東側であるが、悉は寛文八年に至つて、小知行開拓に際して地域的原則を示した。

御家中へ新地被下候地所御定之寛

一、原より下、

二、さくみ御派之下

三、広須御派之下

右之通新地書上請取可被申候以上

寛文八年正月十八日

北村与左エ門殿

岡 文左エ門殿（（奥史引書）御定書）

右の文中さくみ派は五所川原に含まれるが、原より下とは、現在の北津輕郡七和村より以北と云う事になり、旧田舎郡飯詰組に属している。さくみ御派、即ち五所川原派更に広須派、現在の柏村より下と云う事であるが、この三ヶ所は大體同緯度の地域で、これより下は津輕平野の北半と云う事になる。

この地方は、（高岡様へ信政）の御代……其頃
広須の古村、桑野木田村連より芦屋茂り、本より
荒地之事なれば、是より奥西は十三、北は既に十
里餘の向悉く大荒にして有之云々（奥富士物語
上二九四頁）
と云われる通り、本造、広須地域は水過剰、五所
川原地域は水不足（奥五所川原派先
年取立候覺し後出）であり、
従つて開拓には灌溉干拓の工事が必要となつた。

小知行とは、祿二、三十石位の輕重の武士であ
るが、奥富士物語に「元は御足輕之小知行或は鄉
足輕等云て、大勢込に而被召、云々（下巻四
十四頁）」とあり、（中村奎之助明清ハ、和泉利明といふ人
の孫と云、和泉ハ天正の頃南部を戸亂當國へ落
来り、赤堀村に居住、其子孫市重若年より小知行
組へ入り、赤堀村孫市といふ。元和七年三月百石
被下新知士に被仰付（奥富士物語
上三三八頁）と云われて
いる。即ち小知行は足輕の事である。しかし、こ
の小知行の他に足輕の一部として郷足輕、足輕警
固なるものが見える。小知行とこれら兩者の關係
を見ると、貞享二年二月廿四日恒馬基助、沢谷平
左エ門なる者が提出した鶴ヶ岡開拓に關する願書

（奥史引書津輕
信政公筆蹟）に「鶴ヶ岡と申所……御新田に
取立可申候間人数六十六人仕立可申候、警固には
高五十石宛、並足輕には高三十石宛可被下候。左
様候は、右の場所川除水枝江溝等普請仕段々郷足
輕仕付可申候云々」とあり、警固（足輕警固）は
五十石、並足輕は三十石と二十石の差をつけてい
る。即ち石の事から、足輕警固は並足輕より上位
に位する事がわかるが、最後に郷足輕仕付云々と
ある。即ちこの文章からは郷足輕から並足輕、足
輕警固との關係は明確に示し得ない。小知行の語
が用いられた例を見ると、（中知行三上林五右エ
門、三上茂左エ門申候ハ云々（奥史引書津
輕諸日記））
中村小知行大郎左エ門云々（同）と云う用法が
見られ、この場合郷足輕、足輕警固の名称は用い
ていない。この兩者が始められたのは、延宝三年
で「今年諸半足輕警固并郷足輕初る（津輕信政
公有陸奥上）」
と云う記録があり、津輕厂代記録には「郷足輕初
る」としてある。が、兩者の小知行の關係は何も
示していない。

以上の事から、小知行と、郷足輕、足輕警固の

關係を考察すると、小知行とは段の足輕（前掲参照）であつて、更に御足輕、足輕警固と分れる。

のまり小知行は特殊の武士の一派と呼ばれてゐる。特別に組を成してゐたものとは置かれぬ。前掲の木村奎之助の文中、小知行組とあるのは、足輕組（この時代以後の）の事であつて、これは細足輕の事と見る。この事は奥富士物語（上巻二〇）に、（中略）大組とは御前南御親元之左右に分る。御先代より鉄砲足輕也。其次に小組足輕御神社様御代より諸至足輕と御改被遊候十二組也十二組は御手廻組五組、御馬廻組七組都合十二組へ配当する足輕旅也。依之其子と申様之御定被遊候也。其小組足輕……其下は御成附足輕頭御長柄之者の御河れも夫々小知なれは云々」とある事より、右の關係を要當のものと見る。（一注一）

小知行傳は、江戸時代に入り、平和が持続せられるに反し、その抬頭の機会を奪われる事となつた。藩は、これら小知行侍を南拓に利用する事に着目し、南田が成就した場合には、その南地の半分を禄として与える事とする。則ち南田須五所川

原派先手取立（津藩）に

一、五所川原の儀、前より小知行派立御座候へとも云々

とあつて、小知行の下に小知行とは南田の田地半高を以て禄とする云ふとある。この小知行は、更にその南田の功により新知士とせられ、禄を加増された。前掲は、三四十石であるが、後者は百石を中心として十石位からあるとするもので、木村奎之助の語は……百石被下置新知士に被仰付也（女十六）（中略）工藤小左エ門武行父子太郎左エ門武重トイフ、為信公御代天正年中知行高三十石被下置新起召出サレ太光寺近鄰五ヶ村支配頭仰付ラレ、信牧公御代……八元和五年）柏木町へ引越ノ上……御派社立並田畑南畝方へ取付申候ヨシ、……同六年十一月朔日……小左エ門武行家督三十石……寛永二年至家數八十戸余二段成見立ノ場所田畑南畝方成秘ニ付、ノ段御断申上候處同三年御加増トシテ新知トす石下置し、新知士仰付ラレ云々（奥史引書上）とあつて、南田の功により新知士に昇格した事明かである。

寛永二年は二代信牧の時期であるが、この方針は四代信政の時に至つても踏襲された。『三浦權兵衛申上候へ、浮田村野之内に萬千石の處御藏派には立可申候。……御藏派成乾仕候へば、新知加増と拾石被下度申上候二付……新知と拾石へ加増之儀ハ御下向に得御意可申付申付候』(『東史引書津輕藩日記』)によりてその事が知られるものである。新知士とはこれら新田開墾によるものを特別に名付けたものではない。つまり白石程の土を集めて、新知士とし、御馬廻役を勤めていたものである。即ち高岡樺御代初家を貽に遠藤庄兵衛藤原正次と云く有り、此人先祖より油川の郷里村に居住して、初は一百石斗の平士にて其間前知士(當時御馬廻相勤之處云々)御馬廻と云は、新家前知上才又は在り所々により被召出候。小知行を集めて組に御分被遊云々(以上以上)と云う記録によつて知られる所である。

小知行持は、開墾の半分に給止られた事は既述の通りであるが、しかし、小知行はその功により、

直接に新知士とせられたのではない様である。即ち広瀬堤水のきりかへとして替請可仕由以来は与頭八百石土並に小知行へ与頭に被仰付度云々(『東史引書津輕藩日記』)とあり、小知と新知士の間に与頭がある。新知士、即ち百石士となる事は、それ以下の足輕と比し、階級的に一線を画される事となる。即ち換地の際には、

御被地恩習に遠藤新知百石士六人新御代官於御寄合所ニ替調勤之(同)と云う記録が見え、更に前述の遠藤庄兵衛藤原正次と云う人の例にも見られる如く、更に上級の士への立身出世の途が開かれる事をも意味する。従つて小祿の足輕は越つて岡格に昇める事となつたものであらう。この政策は成功して、寛文十二年、津輕郡や新田開墾成給百三十(『東史引書津輕藩日記類』)と云う事になり、元禄年間には約三十万石に近する事となる。

小知行による開墾は、先の荒地が藩士によつて見立てられ、その土地は広さに応じて、取立の小知行数に當り申請し、藩はその申請に応じて許可

を与えて開拓を行わしめた。即ち、下ノ切にて小知行式百人は立候儀申上候、右ニ憑百俵間、式百人可申付旨御仰下、但高之儀ハ三十石、其内にも可然由申来由、則小知行支配人に申渡ス（引番津堅牆日記寛文十一年十一月、又ハ鶴ヶ岡と申所に高三十石の場田地御座候、此ハ新田に取立可申時同人数六十六人仕立可申候、喜國には高五十石宛並足輕には高三十石宛可被下候云々）とある事から、右の事が明かである。

二の附拓は、地政的には寛文八年にその原則が示されたのであるが、記録に見えろる点によると、その地は、広須、浮田長半、上和太、五所川原、床舞、長科、荻野沢、原別、さくみ、嘉環、小友、板屋野木、横内、鶴ヶ岡、等に渡り、原則的地域には統一整するが、中に上和太へ更地の松地の陸改名して柏木となる一の様はこの原則からはみ出したものもある。しかし、その地域が、今によつて示されたとしても、その地域以外の附拓は許可しない云う事ではなく、この時期に津輕平野の南半反は海岸へ主として西海岸が附拓行詰り

になつたが故に、下ノ切以北の比較的親条件の地に重点が置かれたものであり、この餘程理由で、原則的地域からは示れていたとしても、その事は令とは矛盾するものではない。更に又、外ヶ浜に属するものもあるが、前出の令で、下ノ切、原子以北とした事と、寧に津輕平野のみに関したものとしてみても、外ヶ浜も含まれるものと解してよいだろう。要するに中心にして考之れば、原子より下の中に外ヶ浜も入る事、容易に推察される事である。

以上の點にこの時期、小知行待による附拓が大に行われ来つたのであるが、下ノ切方面に於ては、この小知行附拓の出来難い至難の土地があり、この様な場合には、その土地を御藏取、即ち藩の直營として行われた。例ハ五所川原新田にとつてみると、（津輕）廣須五所川原新田先年取立候寛文（興業誌）に、

一、五所川原の儀、前々より小知行派立御座候へども、用水無之段々形方捨り申を、その後原テ助太夫取立候へども太今の普請ゆへ、早敢

取不申ゆへ、竹森殊太夫へ預置、助太夫と申合、小知行派立は相止、御藏派立に取立申候。

殊太夫相果候後は、助太夫一人にて数手辛勞過分なる用水溝水賣土手普請まで出来仕候。

と云う事から、水不足の爲、小知行陣が失敗に終つた理由を述べ、その爲に御藏派立になしたとある。この地は耳賣耳買十年休みと云ふ条付附で行われ、前節で見た場合よりその期間が長く、更に生活必需品へ飯米、衣服運送用の木材に至る迄、更に、この方面には新田奉行を任じて直接に派立の指導監督を行わしめ、堰奉行、又井筒奉行を任じて水利方面を司らしめ、人寄せを設けて他国からの百姓呼寄せを行わしめた。(一五二)

右の事に關して奥富士物語(一五三)に、此御古田村々よりも米銭は為慮(一五四)を被取下、田舎人にも多り候節のよし、其上治田田越と四方に御召付、秋田南部道國は勿論、品目廻装外処処より入来る由、右人不足の事なれば、夫々被下物有て陶庵と云、されば、秋田出田番杯の子孫兩新田へ迄須、下造に而多しと、云々也と

あり、田舎不足を郡外からの移住者によつて補つていたわけがある。

五所川原地方には、前述の如く正保二年津輕知行高之帳に於て、田舎郡新田の部に、桑野木田、五所川原、中野水、中野、玄須等の名が見えるが、電文等向に小知行派として、更に同郡の地域の開拓が行われたものもある(注三)

以上、小知行陣による開拓を述べてきたが、この方法は信濃時代よりあり、それ水信政の寛文期以後、その頃はこの方法を中心にして、積極的に開拓が行われたものである。しかしこれが何時迄続いたかは明確でない。延宝三年に津輕、即ち足輕の土着を認め、この事は、更に一層新田を南播すべく務められた方策であるが、約十二年経たぬ頃四年に至つて、(一五五)只今迄地方に而被下候小知行の請下式御引上通行御被下可成(一五六)田舎戸表より中來(一五七)津輕(一五八)とあり、(一五九)右石土以上は貞享二年に同様の令を出されておけり、この頃に津輕の中止を求められるであろうが、貞享三年に續々開取立に及して、これ以前よりの津輕堅足輕

警固の方法亦そのまゝ採られており、この年のものの水、郷足輕の土着開拓の最後の記録となつてゐる。従つて貞享四年に出された令で郷足輕を止めたものと解し、この鶴ヶ岡の場合も、成乾に従つて地方切上げを行つたものではないかと想われるが、確實な記録は見られないので、推定するに止まる。

以上、この時期に行われた小知行開拓を見てきた。即ちこの方策は成功して、元禄七年に至つて約三十万石の産高を見る事になりたが、しかしこの時期とて、小知行南拓のみ水行われていたわけではない。延宝三年三月十三日、津輕藩は南拓の功者を多数賞したのであるが、これを見ると、小知行の者五十石三名、三十石一名、新地士（新知士）十二名の夫々の名を掲げており、この外に一、新知高二十石宛、
肝煎五人
右者五所川原御派無縁にて入精成就仕止候に付被下之、

一、高二十五石宛

肝煎三人

右者さくみ御派無縁にて入精成就仕止候に付

被下之

（泉史引書津輕藩日記）
延宝三年三月十三日条）

とあつて、肝煎即ち村役人たる上級百姓を合計八人賞しているが、この事は百姓（豪士が純粹の百姓かは不明）による新田開拓が行われていた事を明示する。この地方、五所川原派及びさくみ派は、南拓至難の故に、御藏派立として取立てられた地域であり、即ち（又は仲間とも云う）まはなく、明かに新南拓である。つまり小知行の取立、南拓と共に、百姓による新田開拓も同様に行われていたものであらう。

更に、この時期に至つて、町人請買新田が現われる。即ち

「貞享元年茂森町高成田五矢エ存念書ヲ献シテ樋口村ヨリ茂森町坂下マテノ川原地ヲ開墾シテ数百町歩ノ田地トス」
（津輕興業誌引書成田五左エ内由緒書）

とある。町人請買新田が十七世紀、元禄以前に見られるのは右のものが唯一のものであり、従つてこれをもつて云々出来ないが、この場合、その開拓を行つた土地が茂森町と云ふ事から、そこに町人請買新田成立の一特色を見出しうるのではない

だろうか。しかし、この町人による新田開拓は右のものが唯一のものであるので、何とも云われな
い。

つまりこの時期の開拓を総括的に云うと、小知行による開拓が中心となり、その地域は、津輕平野の大半と外ヶ浜を中心として行われ、開拓が小知行によって行われ難い土地は藩の直営とされて開拓が続けられた。而して小知行の外に、百姓による開拓も已然行われており、更にこの時期、町人請買新田が現われてきている。一方、郷足輕の知行取から藏米取への変更もなされており、既に云ふは、この時期は、中世前期封建社会から近世後期封建社会への移行期であり、これが新田開拓の上にも表われてきていると云つてよいだろう。

注一 郷足輕に關して、名越時正氏は、その著

『近世武家社会の形成、一水戸藩の場合』

『（『戸史散膏通巻第三十号』）に於て、水

戸藩では、寛永以後、旧佐竹藩士が郷士と

なり、これが召出されたもので、と紐に分

れ五三四人あると云う。津輕藩に於いて、右の場合と性格的に似ている処もあるが、完全に同じではない。

注二 奥富士物語（上巻二二六頁）

「其頃より広瀬本造而新田諸役人

一、代官四人（弘前守御馬廻水役番附にて）

一、御藏奉行式人（下三人在宅勤以下管内）

一、御藏回付式人（御馬廻り之御組入に成る）

一、廻奉行四人（御土御奉行式御目見以上）

一、普請奉行四人（御目見）

一、御用医老八嶋村一元（藥種代二十兩と御目見以上）

一、請込役三人（袴役）

一、代官半代四人（同上）

一、御藏半代式人（同上）

一、御升取四人（同上）

一、代官小便四人（同上）

一、御山奉行式人（同上）

一、山守四人（おかしに）

一、人寄止数年拾人

此人寄と申は、新田御開発之前人寄集たる

者の子孫也。自分之持は南き高に應じ、知行其下置たる由、云々」

注三五所川原に關しては、津輕平野南拓史五十
三頁以下に、延宝四年に至り、湊、福川、
五所川原、川端、太曲、長橋、新宮、砂持
場、円満館、長渡浪、佐組、前田、鵜ヶ岡
、大迫の十五ヶ村に達し、広須新田は、同
之の更に以下に、正保年間の広須、姥島、桑
野木田、川端、下中野、薦槌、小畑、十三
の八ヶ村が、享保十二年に至つて、広須通
り二十三ヶ村（村名略）本作通り三十五ヶ
村（同）、山通り三十六ヶ村（同）、川通
り三十二ヶ村（同）、の広須新田メ百二十
六ヶ村に至つたと云う

五 津輕藩新田開発の史的性格

以上、前節迄、江戸時代前期津輕藩に於ける新
田開発について述べてきたが、この節に於いて、
概括的に史的性質を見てゆく事とする。

周知の通り、戦国時代以後、各大名は富国強兵

政策をとり、全国的に夫々の領内開発を行われ、
生産は著しく増加する處となつた。江戸時代に至
つても、各大名は領内の開発に務め、特にその前
半期に著しい増加を不す。即ち各藩は財政の強化
の爲、領内の耕地拡張を計つたものであるが、こ
の結果、全国の生産高は、慶長三年の千八百五十
万石が、元禄年間には其千五百と拾八万石となり、
その間の増加量は七百五十拾八万石程である。これ
を藩の例にとつてみると、加賀藩の場合には寛文
年間には新田高は二十万石余、名古屋藩では寛文
年間迄に八万五千石餘の増加を見、越域的には南
東、東北、就中東北地方に於いて増加が著しいと
云われる。（注一）

東北地方が朝廷の支配下に入つたのは奈良、平
安時代以後であり、室町時代以後開発が大いに進
み、江戸時代に至つてその著しい増加を見る事にな
つたものであり、津輕郡に於いても、その領内
開発が本格的に本つたのは江戸時代に至つてから
である。文禄年間の太閤検地の際、の四万五千石（
實際は、天文年間既に十万石程あつたと推定され

る事から、表高四万五千石を相当に上まわつてゐるものと推測されるが、元禄七年に至つて二十万石と、約三十万石近い数字を見るに至つてゐる。野村兼太郎氏は、江戸時代に於ける新田開発に關する欲求が、当時の経済思想界の二面存する事を明かにしてゐる。即ち(一)は支配者の利益(藩財政の確立強化)と(二)遊民救済である(注二)

この点を津輕藩の場合に比して見るに、(一)に關する点は確かに存したと思われる。例へば弘前城建設を取上げてみるに、その規模は四万五千石の小大名としては大き過ぎると思われ、必ずや將來の發展を期したのであらうし、これを經濟的に見れば、藩財政の拡大強化と云ふ事になると思う。(二)に關しては、これを明示した資料は淺見に見出し得ない。しかし新田開発に際して人寄せを設け、五所川原木造地方では、他国より百姓を寄せた結果、^〆仙台・秋田・南部・松前・林より多入来^〆した(注三)事からすれば、当然領内に遊民が存したとしても、遊民も又この新田開拓に従事したのである事疑義に難くない。従つて、以上の事から、

この時代の全国的な風潮は、津輕藩に於いても同様に見られるものである。

当時、農民移住の禁せられた事から、開拓人の召致は困難な問題の一つであり、津輕藩に於ては、人寄せを設けて、その問題解決に當つて、移住に際しては、飯米、木材等を与えてこれを遇した事、前節に述べた処である(注四)

又新田開発にともなつて生ずる問題に、古田の荒廢と云ふ事がある。即ち新田開発を行う場合、そこに一定年数の無年貢の開闢水条件づけられ、又開闢が完成しても年貢が輕いのが普通である。(注五)正司義稜が、その著『經濟回答秘録』(日本經濟叢書卷二)に、諸国大概五年七年ト完ムレドモ、七八年モ宿メ置ベシと述べており、時代が下るが、享保六年閏七月廿三日、幕府より出された荒廢田畑復旧に關する令(注六)に於ては、荒廢田畑復旧は御年貢二三ヶ年、或ハ四五年モ差免シて行われている事等、この方法は全国一般的に採られた方策である。従つて百姓は、この条件に依つて古田を捨て新田に走る結果、古田の

荒廢を招く事となり、遊民救済の爲なり良いが、
そうでない場合にはむしろ害になると云う理論も
提出される事となる。「注七」(新田開拓に批判
的見解は、初期以来の新田開拓の結果生じた弊害
に対して起つたものである。)

しかし、これら批判的見解が生ずる場合、一般
的に、表高が裏高に占める割合が大きい場合、古
田の喪失による損害が新田成立による利よりも大
さい場合には、そのまゝ適用するたうが、津輕
藩の場合、表高は裏高の約六分の一であり、従つ
て、津輕藩では新田開拓を急務の事として、「代
藩主の積極的な方針として表われ、古田からの百
姓の流入と云う弊害があつたとしても、その事は
津輕藩にとつては、特別注目もされなかつた林を
あり、この流入を禁じた法令は見る事が出来ない。
しかし、新田開拓の爲に、古田がまつたく觀みら
れなかつたこと云うわけではない。寛文二年、藩は
堤に關する条目を定めた。「注八」これを見ると、
古田原左右十間斗八田方二間壛致間敷、右古田ハ
是迄迄通り、古川の分ハ知行二割敷、三千石村鶴

田村広須通新堤川除之堤共、大土手之分ハ面方ニ
十間ツ、ニ堤之分ハ面方ニ、田畑ニ致間敷、但古
田之分ハ格別之事、太田、土場両方二間ツ、所々
寄一両三田畑無用之事云々」とある。古田に關し
ては従来のもの、変更をなす中、新田開拓をのり
禁じており、古田の取潰をさせている處にその態
度を知りうる。つまり古田の減少防止を計つてい
るものであるが、この事は直接に新田開拓遂行の
故の古田荒廢の場合について示すものではないが
、間接的に、古田増重と云ふ点から、前述の林を
弊害を生ずる場合の藩の態度を推定しめ、更に
人寄役の設置も、古田からの百姓流入防止と云う
一面の存在を推測ししめるものである。しかし直
接にこの百姓流入を禁じた記録は見る事が出来ず、
概して云へば、津輕藩に於いては、新田開拓を大
規模に取上げたが故に、右の弊害を認めてもこれ
を黙認したものと受取られる。元禄年間には、洪水
の爲、新田を捨て、古村へ歸つた記録もあり、「
注九」古田から新田へ百姓の流入した事を示して
いる事から、右の推測が正しいと思ふ。

一般に新田開墾を開拓者の創から類別する時、

(一) 領主によるもの(藩の直営)

(二) 藩士又は郷土によるもの

(三) 村役人によるもの

(四) 寺社の請買新田

(五) 農民によるもの(村請新田、及個人によるもの)

(六) 町人請買新田

等が考えられる。(注十)以上の内(一)及び(二)は近似のもので、従つて同一範疇に入れ、又(三)及び(五)も同一範疇に入れてよいだろう。(村役人、豪士の場合もあるが、ここは、普通の百姓だけを問題とする)津軽藩に於いては、(一)及び(二)に属する者が絶対的に多い。

津軽藩に於いては、三代信義以前に於いては家臣、就中中堅のそれ、及び豪士が開拓に当り、四代信政の時期に至つて輕輩の藩士にその任務が課せられる事となつたが、いずれにしてもこれらは藩士たる事に変わりなく、豪士も開拓の巾により藩に召抱えられるのが普通である。

(三)及び(五)の場合、個人で行う場合には、切添となる事が多いと推察されるが、天保二年の高辻帳に『新田有』として記載されている村があり、この事から、切添の存在が推察され、その事は亦、百姓個人による開拓の存在を推察される。しかし、所謂村請新田は見る事が出来なかつた。次に(四)に属するものはまったく見受けられず、(六)は元禄期迄に一ヶ所見られるだけである。

町人請買新田の唯一例と云う事を考察してみると、一般に町人請買新田の場合、開拓の爲資本を投下する町人によつて、目的とする處は新田経営によつて生ずる利益であり、又實際相當の利益を生じたと云われる。(注十一)この場合町人は寄生地主として新田にのぞむわけであるが、この町人が新田経営に至る間に資本の蓄積期間があり、従つて資本蓄積の爲には、その土地に商品となるべきものが存在していなければならぬ。この頃津軽地方には、米以外には見るべきものがなく、従つて米を商品として取扱う事により、商人の生長が見られる事となる。即ち『永禄日記』(元禄十

一に、大雨大水ニ而も、夏中温ニ而、相応之極ニ御座候。(中略)然処米直段以外高直ニ而死人有之候事ハ鰐ヶ沢並嶋勘左エ門青森之豊田彦右エ門、大津屋左エ門、猿皮長兵衛、此四人過分之申出、一親立候故米不足ニ罷成死人多く出申候。願立ニ者一万五千俵と申候得共、内々ハ過分之由ニ付、国中米不足仕候云々』とある。文章に誇張があるとしても、領内が米不足に至つたほどの買付が行われており、家中の支配層と結びついた商人と、その商人が相当の資本を有していた事が知られる。この事と、前章既述の茂森町・成田五兵衛の新田開発(貞享元年)から、十七世紀末に至り、領内の商人も相当の資本を蓄積するに至り、これが新田経営に向わんとしていた時期であると云つてよいだろう。しかし、繰返して云うが、町人の新田開発は右の成田五兵衛のものが唯一であり、場所が茂森町附近と云う事から、この頃の領内開発が、津軽平野内北半に舞台が移され、その原因が、平野の南半の開発行詰りの結果たる事を考へ併せれば、町人が資本を蓄積した頃の開発の余地は、南

拓の資本を多く受ける場所であつたが故に、利益追求の上から経営に乗出すに至らなかつたと思われる。更に、領内開発は、藩士により積極的に行われており、これも町人諸君新田の成立を阻んでいたとも考えられる。しかし以上は推定によるものであり、断定はできない事勿論である。

一般的に云つて、新田開発は相当の資本を必要とする事、周知のことである。従つて、藩の直営事業としてこれを採り上げる場合、藩の支出も又大きいものとなつた事提案に難くない。従つて藩は、この負担を他に転嫁する。換言すると、請取制度(特に町人による)を採用する事により自らの支出を防ぎ、その新田成就に於いては、その負担を藩政の一端に繰り入れると云う、最も安易と思われる方策を採用する事になる。その結果、
『南田ハ一村ノ願ヒニ許サンヨリ、富家一人ニ許セバ其成就速也』(注十二)と云う方法上の利点から、当時所々ニ新田開発有ニ、多ハ江戸ノ番請買テ南々故云々』(注十三)『近年ハ大坂町人多ク新田買之ニツキ』(注十四)等、江戸、大坂

の大商人がこれに乗り出す事となつた。

しかし、津輕郡内に於て、江戸時代前期にこれら江戸、大坂の町人永新田開発を請負つた記録は見る事出来ぬ。その理由として考えられる事は、位置的な向題である。秋田藩の場合、この時期に、南格を担当したのは藩士の二三男であり、へ直接に開発に當つたのは庄首氏の給人であり、村の上層家族である(云々)〔注十五〕南部藩に於いては、郷土たる輕禄の御給人で、これは寛文二期以後に現われてくる(云々)〔注十六〕この二藩は津輕藩と隣接しており、本州の最北端に位置する。利益を目的とする町人諸君新田を成立する為には、その新田の管理と云ふ点から、遠隔の地は不適切と推測され、その様な理由で、これら北辺の藩には、江戸、大坂の大商人の新田投資はざる処となつたものではなからうか。

更にこの時期着目すべき事は、藩士の土着、手形懸がまだ存続していた事である。奥富士物語に、藩政の入部に際して「此頃迄御家中の諸士大に在所仕居の所なれば、今日御着城に就て、客在

方より在所より為御出迎云々」(上巻三十三頁)「御入

部には已前の事のよし、衆衆新屋村居住の侍に新屋吉兵衛と云ふ人有り、其は四百石とかや、亦同郷向屋敷に森内左兵衛惣兵衛と云、是も五六百石の人居りたりしが、折りに五月田植頃、両家共に植付に付て、其亭主の世話に出、女達も田植の見物にも出たるか、跡は子供争ひ、留守に獲しと也」(同)とある事から明かである。武士の手作りと云ふ事は、中世的特色であつて、近世に於いては武士の生産からの遊離、或は町移住と云ふ事が特色としてあげられる。例えは水戸藩の場合、知行取から穀米取への変更は完全なる生産からの遊離は寛永二十年(1643)より現われてきている。(注十六)津輕藩に於いては、寛永間迄はこの中世的遺制が存続しており、その後述は示しているが、この原因として大抵三項が数えられる。即ち

(一) 津輕郡内の統一された時期が全国的に見て遅れてゐる事

(二) 津輕藩は、一度の改革、転封をも経なかつた

事

(三) 新田開発の担当者として、家臣水これに当つた事

以上である。(一)についてみると、津輕郡が、大浦
尚信によつて統一されたのは慶長年間である。二
の頃金国鈔には秀吉の治下から家康へ力が移動
しており、天正十八年秀吉が全国を平定する以前
に於いても、既に戦国時代末期、各戦国大名は領
内の完全支配を画策し、その内の大なるものは永
祿年間より全国征覇を目ざしている。この時期は
り尚信の津輕領内平定に至る間、約三十年間の隔
りがある。更に二代信枝、三代信義の時期迄は家
臣の中に叔く者多く、貞享年間に至つては御蔵入
に仰付けられた結果、御家中甚難渋申したと
云う程であり、一注十八「信義の時期迄は、家臣
の不満を賈う恐れある蔵米取への変更、城下町移
住も採るに至らなかつたのではなからうか。(二)の
点については、徳川家康の岡東入部にも見られる
如く、転封改易が、家臣の鄉村からの分離と云う
政策実施の上からは、きわめて効果的な契機とな
すものである事明かであり、津輕藩と同様、一度

の転封をも経ない長州藩に於いても、寛文年間に
は二百石以下の諸士の離散を認めざるを得なかつ
た(一注十九)事から、津輕藩に於いても、右の政
策を実施する上に、一契機を失つたものと認めて
よいであらう。更に(三)の奥に於いて考察してみ
る時、津輕藩の岡格事業の中心となつた者は、既
述(オ三節四節参照)の通り藩士である。而して
その結果は成功したものであるが、この林を成功
を逆に見るならば、信政の時期に小知行開拓を採
用せざる場合は成功を見ずに終つたか、あるいは
成功したとしても時間的に要に延長されたものと
推定される。右の事は小知行開拓が一応成功した
と思われる時期、即ち貞享、延宝年間に至つて、
城下町移住、知行取から蔵米取への変更がなされ
た事からも云い得ると思ふ。これを記録に見る時
左の如くである。

一、延宝八年四月十二日 惣足輕小知行銀高に致
高五十石銀四十三匁但十石に付八匁六分宛別
紙御書付御波(津輕藩政公)

二、貞享二年三月十五日、御家中知行地方御引上

不致自今以後御藏入被仰付御馬廻延高百石に
付、御藏米六ツ成与力は同五ツ成其外足輕は
切米郷足輕は小入と被仰付惣理米渡方に被仰
付一書二月廿八日御条
目御度とあり是也

二、貞享四年八月六日、只今迄地方に而被下陵小
知行之者下殘御引上追而御檢令可被仰出旨江
戸表より申束

と三度に渡つて、右の変更がなされている。つまり、
新田開拓の一応の成就と云う機会を得て、藩
士の御村からの分離を計り、農民の直接支配と云
う近世的方向へ踏切つたものであると思われる。
而して津輕藩に於いては、これが貞享、延宝期に
於いてなされたものである。

次に津輕藩のこの時代の新田開発を時期的に見
た場合、そこに一つの画線を設ける事が出来る。
つまり三代信義以前と四代信政の時期である。へ
半三節及伏才四節以前者に於いて新田開発の指導
的役割をばしたものは、中堅藩士及び牢人豪士
であり、後者に於いては小知行侍である。津輕藩
に於いては既述の通り、この時期、藩士が未だ知

行地に往居しており、これを新田開発の上から見
て、一旦城下町移住が行われた後の場合と在郷の
それを比較する場合、後者が開拓事業に従事し易
い事は容易に推察される事である。又藩にしても、
農民支配の上から、藩士による開拓の場合が、町
人、寺社による場合より好都合と思われる。従つ
て藩士による開拓を採用する事となつたものと推
察されるが、この様本方策が採られたのは津輕藩
のみではない。信政の時期に至つて採られた方策
は、小知行侍による開拓である。小知行侍は、身
分階級から云へば、家臣団の最基底部分に属し、
五十石位を禄として与えられている。これらの者
にとり、この時代には最早昇格の機会は失われて
おり、従つて彼等にとつて新田成就に附随する策
件としての開拓面積の半知給附、及び、その内
による新知士への昇格と云う事は、彼等を開拓事業
に積極的たらしめた主要な原因であると思われ、
更にその内の一因と思われる事は、藩士の土着
が、未だ行われていると云う事である。この事は、
秋田藩の場合、思う程の効果をあげ得なかつた事

から推察される処である。(注二十)

以上、江戸時代前期の津輕藩による領内南拓の状況を見てきたのであるが、広須地方の一部を除いて、新田開発は一応成就せられ、以後、派立も存するが、荒廃田の復旧が主として行われた様である。新田南拓が大規模に行われたのは元禄期迄であり、元禄八年の大凶作が、領内に相当数の荒廃田畑を生じしめたものと思われ、以後この復旧事業が主として行われたものと思われる。

注一 小葉田淳 近世経済の発達、近世社会へ新

所収(二一)
六頁参照

注二 野村兼太郎 徳川時代の経済思想 六三六頁参照

注三 津輕信政公事蹟要中、元禄九年八月頃

注四 牧野信之助 武家時代社会の研究 三三六頁参照

注五 同右 三三八頁参照

注六 徳川十五代史才八編六十九頁

注七 熊沢了介 集義外書 日本経済叢書卷三十三、二〇二頁以下

注八 津輕厂代記類、寛文七年頃

注九 同右 元禄六年二月頃

注十 河手龍海 近世中期「史教育通」卷五十一号

注十一 大石慎三郎 町人請願新田の成立事情 史学雑誌

六十九

注十二 正司考模 経済向答秘録 日本経済叢書卷三十三、三八八頁

注十三 荻生徂徠 政談 日本経済叢書卷三十三、五五五頁参照

注十四 大石久敬 地方凡例録 日本経済叢書卷三十一、九七五頁参照

注十五 鎌田永吉 秋田藩に於ける幕藩体制成立ノ

一ト 三頁参照

注十六 盛田穂 近世農地証文の研究 八九頁

注十七 名越時正 近世武家社会の形成 史教育通卷三十九号

注十八 奥富士物語、下巻二二七頁

注十九 関順也 藩政改革と明治維新 十八頁参照

注二十 西岡虎之助 民衆生活史研究 五三三頁以下参照

補 説 新田開発と山林

弘前藩に於いては、その豊かな山林を財源の一つとし、山奉行を任じてこれの監督、管理に当らしめた。従つて、樹木の乱伐は禁ずる処となり、この林を山を留山と云い、寛文四年にこれが行われ始めた云う。而して伐採には制限を加え

これに違反する者は勿論処刑せられた。(一注一)

新田開拓に際しては、特別の場合には雑木の伐採も行われた様である。即ち、延宝六年九月に、

「横割より上へ晝飯喰場迄之間、御派普請とする爲に、雑木四万本餘を切つた例がある。(一注二)」

この場合を見ると、開拓の諸経費は開拓者の自己負担に自分物入りで行われており、雑木伐採費却の利益をその開拓に当てしめる。即ち援助の一形式と見られ、むしろこの様な例は、例外的に取扱われたものと推察される。(普通、新田開拓が藩士によって行われる場合、藩の援助がある。)

又水田耕作に關係ある山林は、「田山」と云われるものである。「旧私前藩山林法」に「古栗定法之覺、元和二年被仰付候」として

一、田山

元来爲用水諸木植付候ニ付仕立見継山同様伐取願出候節ハ木立模様見分之上老木悪木之類

勝手尚代り木植付候様御沙汰被仰付候事、

とあって、田山の伐採に關しては、老木悪木をもち、その後には代りの木を植付ける事を案

件としている。同様の令は、時代が下るが天保七年以後、山方格帳(一注三)に

一、田山

右者用水方之爲、被立置候ニ付、伐木御停止并屏風山之義ハ新田開拓ニ付斷之事

とある。後者においては田山の伐採を禁止しているが、この田山は、田方の用水確保の爲とあり、木材の乱伐によって、水害の起る事は現在に至るも同様の事で、この点に着目する結果、この様な保護を加える事となつたものであろう。

新田開拓に際しては、その地域が特に開拓の困難な土地であり、而して藩の直營として開拓が行われる場合、そこに移住する百姓に對して、家屋建造用の木材を給付する事もあつた。而して、山林は藩の嚴重な監視下にあり、必要に応じて、悪木老木から順次伐採してその入用に充てゝいたものと思われるが、しかし「田山」にいかなる種の樹木が植付けされたかは、知る事が出来なかつた。藩にとって、木材は重要な輸出品であり、その爲にも藩は、賤賣確保の爲にもこれら山林を直接支

配していたものであろう。

注一 日本林制史資料 弘前藩 八頁

注二 同右 三二頁以下

注三 同右 五八二頁

〔参考文献〕

近世社会 (新日本史大系第四卷)

土屋喬雄 封建社会の構造分析

牧野信之助 武家時代社会の研究

佐藤公知 西津輕縣郡史

橋土貞藏 津輕平野南拓史

土屋喬雄 日本経済史概要

旭方史研究協議会 近世地方史研究入門

岡順也 藩政改革と明治維新

野村兼太郎 徳川時代の経済思想

西岡虎之助 民衆生活史研究

森田稔 近世農地証文の研究

今野敏 津輕藩々政に關する一考察 (日本「史」
一〇六号)

松好貞夫 新田の「史的」性格 (同志社論)

大石慎三郎 町人請願新田の成立事情

(史学雑誌
六十ノ九号)

鎌田永吉 秋田藩に於ける

幕藩体制成立ノ一ト (「史」
十三号)

大石慎三郎 近世初頭に於ける「土豪」

開発について (史学雑誌
六三ノ六号)

河平龍海 近世中期 (「史」教育通
卷五十一号)

名越晴正 近世武家社会の形成 (「史」教育通
卷三十九号)

中村考也 近世農村社会史